日本に傳はる波斯文に就て

（圖版第五圖　參照）

此文書（別掲寫眞版參照）の原本は、南蠻文字の名によりて京都の山田永年氏の藏せらるゝ所なり、蓋し解說の冒頭に、「此是南番文字也」とあるによるならむ、もと高山寺の支院方便智院に藏せしが、維新の頃他の多くの寶物とともに世間に流出し、轉輾して山田氏の手に歸したりといふ、地質は鎌倉時代の日本紙にして、毛筆墨汁にて書きたるが如し、曾て久しく京都帝室博物館に出陳せられしも、世の注意をひかず、以て今日に至れりと、余偶々此寫眞を見て、其南番文字といふものゝ波斯文（新）なるが如きを思ひ、就て研究を試みしに、全く波斯の詩を記せるものにして、下方に記せる譯文とは、到底意味の合するものに非ざるを知れり、今茲に之を說くもの、もとより史上にしかく大なる價値を有するが爲には非ず、只だ我が鎌倉時代に於て、絕域の文字が傳へられ、而して能く今日に之を殘すの珍なるを思ふとともに、之を以て漠然南番文字の名の下に葬り去りて、人を惑はしむるの愚なるを思ふによるのみ、もとより余が波斯語に關する知識の如きは極めて淺薄なれば、解釋の間誤謬の多々なるべきは自から恐るゝ處、而して此詩も、或は古來彼國に傳へて有名なるものゝ一篇一節なるやも知る可らざれども、それも亦余の知悉せざる處なり、他日幸に是正と聞知の機を得て、讀者の寬恕を請はんとす。

文書の左端に記して曰く、「爲送遣本朝辨和尙禪庵令書之彼和尙殊芳印度之風故也沙門慶政謹記之」と、慶政上